

海を渡ったテディベア

—マルガレーテ・シュタイフの運命—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

テディベアとして世界中で親しまれるようになる熊のぬいぐるみはドイツ南部の小都市で誕生した。生みの親であるマルガレーテ・シュタイフ(1847-1909)は1歳半で小児麻痺を患い、右手と両足の自由を失って61年の短い生涯を車椅子で過ごした。

幼くして重すぎるハンディキャップを背負った彼女は一介の裁縫職人から出発し、のちに高級玩具のトップブランドとなるシュタイフ社の創業者として後世に語り継がれる存在となる。通常なら不可能なことを可能にしたきっかけは歴史的ヒット商品となるテディベアの製作だった。テディベアをめぐるマルガレーテのドラマティックな一生は逆境をのりこえる知恵と勇気と行動力へ導いてくれるだろう。

象の針刺しで評判に

マルガレーテは人口2万人ほどの街ギーンゲンで姉2人に弟という4人姉弟の3番目の娘として生まれた。父親は大工の親方だった。

障害を抱えながら性格は明るく弟のフリッツが曳く小さな荷車に乗って学校へ通った。好奇心が旺盛で成績もよく自分が加わるゲームを次々と発案して友だちと遊んだ。マルガレーテをグレーテル(おてんば)と呼んだ母のマリアは彼女を甘やかさず編み物を覚えさせた。

洋裁学校に進んだマルガレーテは姉たちと共に自宅で近所の針仕事を請け負うようになる。3姉妹の仕事は評判がよく顧客も次第に増えていき、当時の最新技術であるミシン

を購入する。右手で弾み車を動かす手回し式のミシンは右手の不自由なマルガレーテにとって扱いづらいものだった。だが彼女はあきらめずミシンを逆向きにして右手で布地を押さえ、左手で動かせるようにした。

姉たちが結婚して家を出ると、父ハンスはマルガレーテのために2階を裁縫の仕事部屋に改造した。当時のギーンゲンはフェルト産業が盛んで、マルガレーテも30歳になった1877年、フリッツをはじめ家族や親戚の支援でフェルト・メール・オーダー・カンパニーを設立する。彼女は人を雇ってフェルトを使ったドレスや子供服をつくり、売上げは順調に伸びていった。

33歳のとき、雑誌で見た象のイラストを参考にクリスマス用のピンクの小さな象の針刺しをつくってみた。これが予想外にぬいぐるみのおもちゃ



マルガレーテ・シュタイフ

として評判になる。

当時はブリキや木が主流で柔らかい素材を使ったおもちゃはきわめて珍しかった。彼女が創作した初のぬいぐるみは注文が殺到し、やがて犬や猫や豚のぬいぐるみも売り出した。

1880年、彼女は玩具に的を絞ったフェルト・トイ・カンパニーを創業する。のちのシュタイフ社の歴史がここから本格的にスタートした。

大統領のお気に入り

玩具ビジネスは着実に発展し、フリッツの息子たちが成長すると彼女の仕事を手伝うようになる。とくにマルガレーテになついていた次男のリヒャルトはさまざまな新製品を提案して彼女の片腕となった。

1902年、マルガレーテは彼が動物園でスケッチした熊の姿態をヒントに55PBというぬいぐるみを製作する。55は座高55cm、Pは毛の生えた生地、Bは動かせるの略称だ。糸製のジョイントで胴と接続した手足が動く画期的な仕組みで生地は高級素材のモヘアを使用していた。

翌年、ライプチヒの見本市に出展したものの、従来のフェルト製品と違って大きく、重く、高価でまったく評価されなかった。ところが最終日にアメリカのバイヤーの眼に止まり、3000体の注文を受ける。これがのちに第26代アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトのニックネームにちなんでテディベアと呼ばれるようになる。

1902年の秋、狩猟好きのルーズベルトはミシシッピ州で開かれた熊狩りのイベントに参加した。しかし獲物は見つからず主催者は大統領の面目を保つために綱につながれた小熊を撃つことをすすめた。ところがルーズベルトは「こんなことはできない。スポーツマンシップに反する」と激怒して小熊を解放した。

このエピソードが挿絵入りで翌日のワシントンポストに掲載され、テディベアは大統領の美談の象徴として全米の話題になる。シュタイフ社の55PBは大統領晩餐会のテーブルディスプレイとして使われ、テディベアの愛称で爆発的なブーム

を巻き起こす。

1907年、テディベアの総生産数は97万4000体にのぼり、ギーンゲンでは工場生産が追いつかず街の人々が総出で熊の詰め物をしていると噂された。

子供たちに最良のものを

通常のぬいぐるみと比べてテディベアは余りにも値段が高く、当初は売れるはずがないと同業者に嘲笑された。マルガレーテがリスクを覚悟しつつ販売に踏み切ったのは次のようなものづくりの信念を抱いていたからだ。

「話しかけて、頬を寄せて、抱きしめて、うれしいときも、さびしいときも、ぬいぐるみは子供のハートのいちばん近くにあるおもちゃ。だからこそ最良のものを与えてあげたい」

ぬいぐるみと遊ぶ子供たちを常に観察していたマルガレーテはぬいぐるみが子供たちのハートに深く訴えかけるものであることを熟知していた。ぬいぐるみは感情のない商品ではなく子供たちと喜怒哀楽を共にする特殊な商品なのだ。

したがって相手が子供だから手を抜くのではなく子供だからこそごまかしのない最高の品質の商品を与えなければならない。未来に生きる子供たちの夢や希望や期待をまがいもので裏切ってはならないからだ。

だからテディベアは機械による大量生産を行わず、いまでも熟練した職人の手作業によって一つ一つ丁寧につくられている。選りすぐりの素材のみ使用し、汚れたら洗えるので衛生面も安心で全世界の安全基準をクリアしている。芸術的な職人技は細部まで眼が行き届き、世界で唯一の自分だけのぬいぐるみとして愛されている。

誰よりも子供たちを愛したマルガレーテは生涯独身のまま61歳という若さで肺炎で亡くなった。だが彼女がわが子のように生み育てたテディベアは滅び去ることがない。アメリカのスミソニアン博物館にはルーズベルトが孫に贈った1903年製のテディベアがいまも飾られている。